

自分のためにやるといふ観点

——この講座を地域の人に発信したいと思っただ動機を教えてください。

木田 直接的には妻に「地域の活動を何かして」と言われたのがきっかけです。それは僕にとっても是非やりたいことでした。自分の専門的な倫理学や哲学といったものを、社会に還元できればと思います。そういう公に関わる意味でも講座をやりたいと思いました。

「個人の自由」は社会が決めている？

——講座の内容について詳しくうかがいたいと思います。潜在的な本当の希望と顕在化している見せかけの希望は違っていることがある。だからお節介なことをすべきたというのでしょうか。

木田 そうですね。「個人の自由」と思っているものは、社会が決めている部分が多い。しかし、それに気づかず論争していることが非常に多い。

適応的選好形成(注4)理論を背景に話しましたが、この理論は少し危険を含んでいることも事実



楽死ならいい」というのがシンガールの理論と一緒なんです。ですから、こちらもそれ相応の理論武装をしないと説得できない。

私たちはなぜ優生思想(注5)のほうに傾きがちなのでしょうか。

木田 母性の素直な表現は優生思想です。それは間違いありません。しかし、社会が優生の方向に行くのはやはり望ましくはありません。

まともな民主主義は単純な多数決ではないはずで、すると圧倒的に多い健常者の意見だけが力を持つような社会的傾向は問題だと思えます。最終的には多数決にならざるを得ませんが、そうならざるを得ないだけであるという民主主義システム自体の弱点が目が行かぬばかりではありません。様々な当事者の声が届いてきて、その後の多数決になるはずなのに、実際に出生前診断の最大の利害関係人、当事

ただ苦痛を長引かせるというだけであれば、それは死なせてあげるということも考えなければいけない場面かと。ただ、それは本当に例外的なことだと思います。

相模原の障害者殺傷事件のように身勝手に実行に移してしまふ人もいますね。

木田 実は、彼の「人間の形をした動物論」というのはオーストラリアの倫理学者のピーター・シンガーとほとんど一緒です。

人間の中にも保護に値しない人格があり、動物の中にも保護に値する人格(パーソン)がある。霊長類は時間意識があつて、思い出や未来への期待を持って生きていくので、そうした時間意識を含む人格的態度自体が保護に値する。よって未来を奪う安直な安楽死は許されない。逆に、時間意識を持たない霊長類以外の動物は、痛みはあるだろうし、今生きたいという感情はあるでしょうが、明日も生きていたいという時間意識はない。だから理由があつて痛みに配慮しつつ瞬間的に安楽死させるのであれば問題がない。ざっくり言つて、これがシンガーの理論です。

時間意識を基準にすれば、それを持つているのは人間、持たない重度知的障害者は動物なので、安楽死はいいということになります。包丁で刺すのは問題外ですが、「安

者であるはずのダウン症の人の意見が前面化しません。

発言できない当事者に代わる適切な代理人を

——もつと当事者の声が届きやすい社会が求められている、ということですか。

木田 それが本質的な問題だと思えます。男女平等にしても、女性抜きで議論しては話になりません。こういう問題でも、障害者の人の意見が汲み上げられないと話にならないわけです。でも重度知的障害者の人は発言できません。出生前診断において最大の当事者は、胎児かもしれないのですが、彼らも発言できません。そうすると適切な代理人を立てる必要があります。胎児に痛覚があるかどうかは、はっきりわからないにせよ、ない」と一方的に決めつけられて中絶されてしまう年間20万人もの胎児の利益を弁護する代理人はやはり必要です。

少数者や弱者の意見が聞こえないまま一方的に決定することがないようにする配慮、そして彼らの意見を汲み取って悩むことが大切だと思えます。悩んだのであるならば、中絶に賛成したとしても、それによって肩身の狭くなるかもしれない障害者に配慮することも忘れないでしょう。悩んだのであ

グループ討議の議題
①「もしあなただったら出生前診断を受けますか？」
②「障害者はいないほうがいいのか？」
それぞれテーマを4名ずつの4グループに分かれて、話し合いました。討議の時間は、それぞれ10分と限られた時間でしたが、白熱した話し合いとなりました。

参加者の感想

- * 出生前診断を切り口に生存権や社会のあり方へと広く深く展開されて、面白かった。
- * 中絶という重いテーマでしたが、自分と違う意見にふれることができ、き勉強になった。
- * 社会と生命のつながりについて、改めて自分を振り返る機会になった。
- * グループで話し合いができたのがよかった。
- * もつと生命倫理について学びたい。
- など、生命倫理、死生観、社会とのつながりについて討議できるような継続講座の開催を望む声が多数寄せられました。

用語解説

適応的選好形成(注4)
現実には適応した形で選好を形成すること。長年困難な状況や立場に置かれた個人がその状況に適応するために、慎ましやかな選好しか抱かなくなってしまうことへの批判。インドの経済学者、アマルティア・セン(1933年-)より。

優生思想(注5)
生殖管理により人種を改良する、という発想。手段として、産児制限・人種改良・遺伝子操作などが提案された。この考えは、強権的な国家による人種差別と人権侵害、ジェノサイド(大量虐殺)に影響を与えた。

るならば、中絶に反対したとしても、それによって負担をこうむる家族への社会的扶助を訴えることも忘れないでしょう。悩んだ末であれば、どちらの見解に転ぼうとも尊重に値する意見だと思えます。

——現状では、当事者やその家族が、当人だけの問題としての障害や人権問題を引き受けている状況のようですね。

社会は能力において有用性を示すことに偏重しがちです。このような社会で皆を受け入れるとは、どのようなことですか。

木田 公民意識についてですが、人は自分の利害を公に発言すれば公民になれると思っっている部分があるのでしょうか。個別の利害の集積としての全体意識ではなく、「たしかに自分は富裕層だけど、だからといって富裕層に有利な施策を支持するのではない」という態度、フランスの思想家ルソーという人と一般意識ですね。一人ひとり自分の立場はこうであるけれども、いったんそれを括弧に入れて、全体にとつて責任を果たすということを教育できればいいと思えます。それを具体的にどうすればいいのかは、僕もまだきちんと考えていないのですが、少なくとも方向性としてはそれでかまわないと思えます。

立場を超えた責任を果たせるように

——誰が当事者になるかわからない。だから社会、皆で担わなければならない。では、実際にはどうすれば良いのでしょうか。

木田 たぶん教育だと思います。